令和４年度の但馬牛種雄牛現場後代検定成績

毎年、現場後代検定法を用いて産肉能力を推定し、その成績により基幹種雄牛を選抜している。令和４年度現場後代検定成績が判明した。検定種雄牛の７頭中、４頭が基幹種雄牛に選抜され、５年度から供用が開始される。

内　容

現場後代検定とは、種雄牛※の産肉能力を推定するために、実際に種雄牛の産子を生産し、産子の枝肉成績を基に育種価※を算出する手法である。本県では、毎年７頭の種雄牛に対して現場後代検定を実施している。

検定方法は、種雄牛１頭につき、繁殖雌牛40頭に人工授精を実施する。各種雄牛の産子（以下、調査牛）は16頭必要であり、６か月齢に発育と体型の良好な個体を選抜する。調査牛の肥育は、県内肥育農家２戸（８頭）と畜産技術センター（８頭）の３か所で実施し、枝肉成績の判明後、育種価を算出する。

実施した検定種雄牛は、「忠清土井（ただきよどい）」「茂貴波（しげたかなみ）」「阿津里土井（あつさとどい）」「村岡土井（むらおかどい）」「菊卓丸（きくたくまる）」「忠正土井（ただまさどい）」「北義姫（きたよしひめ）」であり、育種価をランク標記で示した（表）。

「菊卓丸」の枝肉重量の育種価は、A^{+++}であり、歴代最高の成績を示した。

検定種雄牛７頭と令和４年度の基幹種雄牛12頭の産肉能力を比較し、「茂貴波」「村岡土井」「菊卓丸」「忠正土井」の４頭が令和５年度の基幹種雄牛に選抜された。

今後の方針

選抜した４頭の種雄牛を含む12頭の基幹種雄牛を活用して、引き続き但馬牛改良のスピードアップと神戸ビーフ、但馬牛のブランド力の強化を図る。

※種雄牛：人工授精に使用する雄牛。現場後代検定実施中の種雄牛を待機牛と呼ぶ。一般供用される種雄牛12頭を基幹種雄牛と呼ぶ。

※育種価：遺伝的能力を数値で示したもの。皮下脂肪厚は小さいほど、その他の形質は大きいほど能力が高い。

吉田　裕一（北部　畜産部）

（問い合わせ先　電話：079－674－1230）

表　令和４年度の種雄牛現場後代検定成績

種雄牛名		忠清土井	茂貴波	阿津里土井	村岡土井	菊卓丸	忠正土井	北義姫
血統	父名	照忠土井	茂和美波	広阿津土井	照村土井	宮菊城	照忠土井	石義丸
	母方祖父名	菊俊土井	芳山土井	福芳土井	福広土井	丸宮土井	菊俊土井	宮喜
育種価	枝肉重量	D	A	C	A	A^{+++}	B	D
	ロース芯面積	C	A^{++}	A^{+}	A^{+}	A^{+}	A	D
	バラ厚	A^{+}	C	B	B	A^{++}	A^{++}	D
	皮下脂肪厚	B	C	A^{++}	A	B	D	C
	推定歩留	A	A	A^{++}	A^{+}	A	A	D
	脂肪交雑基準	B	A	D	B	C	A	D

A^{+++}：上位 0.13%　A^{++}：上位 2%　A^{+}：上位 10%　A：上位 25%　B：上位 25～50%

C：下位 25～50%　D：下位 25%